

真理觀の転回

—アウグスティヌス懐疑論批判の射程—

以下の小論は、第八九回教父研究会（九九年七月、「アウグスティヌス懐疑論批判の射程」）で話したことを、メモに拠りながら論文風に書き改めたものである。随分時間も経ち私の記録も不十分だが、なるべく再現に努め、いくらか補足した。従って、討論部分との齟齬があるとしたら、その責任は私にある。

当日は小著『アウグスティヌスの懐疑論批判』（九九年二月創文社刊）を前提する形でお話しさせていただいた。

この本はアウグスティヌスの初期の著作 *Contra Academicos*（以下CA）を専ら扱ったもので、研究会では先ず、ポピュラーとは言えないCAの紹介から始めるべきところだったが、若干の資料で済ませ、あとは以下で扱う二つの

岡 部 由紀子

話（「一つの全体として読む」「アウグスティヌスの真理論という問題」）を簡単に述べて導入とし、小著と合わせてご批判やご意見をいただいた。たくさんの方々から、様々な角度から、多くのご指摘をいただき（その一部は、小論の後に記録されている）ここから感謝している。紙面を借りて改めて御礼申し上げます。

はじめに

1 CA研究の意義の一つは、この書物がアウグスティヌスの回心後最初に着手された著作であること、そして晩年まで著者アウグスティヌス自身によって、その活動の「入口・出発点」として位置づけられてきたことに示され

ている。「入口」とは、単に時間的に先行する通過地点なのではなく、それが「始まり」であることを云うものだからである。そこで何が論じられたかを読み解くことは、アウグスティヌス研究にとつても、彼がその形成に絶大な影響を与えたとされる西洋中世思想研究にとつても重要であろう。私自身はそこで提起された問題が、更に現代哲学の先鋭的な試みとも問題を共有する、大きな射程をもつ議論であつたと思つている。

ところで、CAは全三巻からなる書物であるが、様々な理由から、その全体が一つの視野のもとで統一的に構成された論考であることに疑いを持たれてきた。そして研究者や時代の関心に依つて特定の部分だけが取り上げられ、それに依つてその主題もまたそれぞれに論じられているが、そのことは結果として、この著作の意義を小さく見積もられてきたように思われる。小著の意図は、そのような様々な理由に対して反論の余地があることを示すこと、更に全巻が一貫した問題提起の視点から構成されていることを、その構成部分をなす諸議論が全体的な構想のうちで担っている役割を明確にすることを通じて示すことにある。それは、この最初の著作が何であつたか、その意義も含めて改

めて問い直すことでもあり、その過程で私は、CAが、アカデミア派懐疑論の論駁というかたちで遂行された、アウグスティヌスによる新しい真理論の試みであると考ええるに至つてゐる。

2 哲学という営みが始まって以来、問いの立て方ないし切り口には時代に依つた様々な角度がある。古代、中世、近代と眺めたとき、その切れ目のところで、アウグスティヌスとデカルトによつてそれぞれ懐疑論批判が試みられたことには意味があるだろう。懐疑論にせよその批判にせよ、認識論あるいは真理論における大がかりな見直しへの要請を反映するもののはずだからである。彼らの懐疑論批判はそのような大いなる転換点を記録するものと考えられるべきものである。アウグスティヌスのそれは、(ともすればデカルトのそれと同じようなものとみなされて)どのような意味をもつかまだ十分に論じられていないと私には思われるが、CAで企てられた懐疑論批判の意義がそのような転回に連なるものであることを我々は認識し直さなければならぬだろう。そうすることによつてまた、彼がそれを「入口」として位置づけてきたことの意味も明らかになる

はずである。

人間であることと言葉を持っていることは極めて根元的なところで結びついていると考えられてきている。現代では、行為することと言葉が不可分であることもよく認識されているだろう。言うまでもなく、「真・真理」という問題は、言葉のないところでは問題にならない。その限りで「真」は極めて深刻に「人間」の問題である。

たしかに従来のCA研究においても、それが何らか知識や真理に関わる問題であることは、認識されていたであろう。しかし、この著作が提起していた「真・真理」をめぐる問題がどのような議論であり、どのような射程をもつのか、十分に解明してきたとは言えないのではないか。それを例えば単純な不可知論批判として済ませることは、彼の果たした思索の意味を見積もり損なうことになるように思われる。

「真・真理」について考える、論じるという営みは、既にメタレベルの活動である。その限りで、懐疑論も懐疑論批判もそのような営みであり、その根底にあるのは、「真」という問題は、人間であるとはどういうことかを理解することにおいてどのように位置づけられるか」という、いわ

ば真正の形而上学的問いである。

CAの問いは、そのような、いわば哲学にとって普遍的な問いの地平に展開されている。このことを見失うなら、アウグスティヌスの、更には西洋中世思想の果たした、先述の問い（人間とは何かという根元的問いにおける真理とは何かという問いの位置づけ、という問題）に対する極めて重要な貢献を見過ごすことになるだろう。

先取りして言うなら、それは現代の真理をめぐる諸議論においては見過ごされがちな、「真」について価値論の視点から展開される問題提起であり、非實在論的概念として真理概念を位置づけようとする現代的な試みとも問題を共有する、極めて大きな枠組みをもった議論である。私はアウグスティヌスが、行為論における真理概念の位置づけの分析からこの問題に迫っていると考えている。

(一) 一つの全体として読む

1 アウグスティヌスの諸著を読んでいるとしばしば体験することであるが、とりわけCAを読みながら、私は、一冊の本（CAの場合は三巻からなると言うべき）を一っ

の全体として成り立たせているのは何か、それを一つの全体として読むことを可能にする視点は何であるのか、という問いに何度も戻らざるを得なかった。この問題はCAに固有の事情（カシキアコム対話篇成立のクロノロジーに関する事情）にも絡んではいるが、それ以前に、もっと一般的かつ基本的な意味で、テキストをどう読むかという問題であったと思っている。

「一冊の本を一つの全体として読む」とは当たり前すぎて分かりにくいと言われるかも知れない。大抵の書物は、少なくともそれが成立したそのところでは、著者ないし編者によって「一つ」として（大抵の場合一つの書名の下に）括られていると言うことができよう。それを始めから終わりまで読むことが「一つの全体」として読むことであると言うのであれば、私の問いは馬鹿げているからである。

アウグスティヌスは *Retractationes* のなかで、CAが三巻からなる書物であること、第I巻を書き終えて後に別の対話篇を著し、その後再び第II巻にとりかかったことを書き残している。著書自身が三巻として一括りにしたこと、疑われてはいない。しかし、小著で述べたように、研究者たちは、内容的に（第I巻と第II巻だけに書簡体の序

文があるというような形式的相違からも）、各巻がそれぞれ部分となって全体として同じ一つの論考を成していること、読むことには消極的で、例えば、第I巻の議論がCA全体の論考の一部である度合いは別の書物との親近性よりも弱いというような扱いをしたり、第III巻後半のモノローグ部分を突出した仕方で読んで来ている。この著作が三巻で「一つ」としてあることには異論があるのである。

他方また、この著作は対話篇形式をとっていることもあって、それが書かれた時期に実際に成された討論の記録を濃厚に反映するものであるという見解がある。この見解は、アウグスティヌス以外の登場人物の発言について、著者の意図を必ずしも反映しないと見なす道を開くだろう。そしてCA全体を「始めから終わりまで」読むことには差し支えなくとも、「(内的な統一性をもつ)一つ」として読むことには、原理的に、障害になるだろう。この見解に立つ人の多くもまた、第III巻後半のモノローグ部分のみを重視する読み方にたどり着いている。そしてそれは、私が見るところでは、CAの論考が何であったかについて、全体を一つとして読む場合とは別の結論を引き出している。

以上についての私の見解は既に著している通りである

(それについては次節以下で簡単に触れる)が、それが妥当か否かは別として、ここで指摘したいのは、どのような見解に立つにしても、論考として「一つ」であるとはどういふことか問題にならざるを得ないことである。それは著者がそう編成したからとか、対話篇の下敷きとなった実際の討論の成り行きに由来するというような理由に拠ってではなく、(そのような理由では納得されていないのだから)何かしら別の視点から説明されなければならないだろう。

この問題は、問題の性質上、全ての著作について問われるはずである。だが、CAでは右に述べたように、その内的統一性を疑う所説の論拠が、テキストのそれぞれの箇所を「部分的」に読むことと強く結びつく形で主張されている。そのことがこの問題を我々に露わにするのである。

ところでまた、私自身が、テキストの或る部分を一種の *digestion* として、あるいは何かしら副次的な関心ないし配慮の故に挿入された部分として扱おうことがある。別の研究者たちは全く逆の主張をするかもしれない。その場合に、彼らと私は恣意的に、それぞれ別の視点から、強弱を付けながらテキストを読んでいるのであって、どちらがどうということもないのだろうか。

我々はそうは考えてはいないはずで、それぞれに「アウグステイヌスが問題にしていたのはこれこれだ」とか、「アウグステイヌスはこのように考えていたのだ」とか言ったり書いたりしているだろう。そして、もちろん、アウグステイヌス自身が「こちらが私の考えていたことだ」と言ってくれることは無い。CAは何を論じていたのか。それを問うことは、アウグステイヌス像を検証し直すことにもなるだろう。そのような中で、私たちが争っていることは何なのであろうか。少なくとも、彼らも私も、単純に「真の」アウグステイヌス像を明らかにする、というようなことを最終的に目指しているのではないはずである。

私にとっては、CAについて異なる読み方を提唱することとは、この書物を三巻で「一つ」として読むことであった。そしてそのことが、単純に、著者アウグステイヌスがそのように括ったからというだけでは説明にならないとき、「一つ」であることを何に拠って言えばよいのか、何度も問い直さざるを得なかった。結局、今のところ言えるのは、「ひとつの全体」については、広い意味での哲学(つまりは、人間とは何であるかという我々の根本的な問いの営み)

の問いとして「ひとつの全体」をなす規模というようなことをどう見積もるかという問題に照応するように思われる、ということだけである。

(いずれにせよ、これはきっぱりと白黒つけるような形で話が収まるような問題ではないのかもしれない。そういうことについて或る主張をするためにはそれ相応の覚悟も必要だが、それ以上に、そのように読むことと表裏一体となっている、「本筋」として読みとられる議論のもつ或る種の力がそう迫ってくるのだという実感がある。CAについて、あれやこれや長いこと試みてきたが、今は、ようやく柱を立て、壁を作り、屋根も葺いて、建物の体裁をつけてみたところであって、これが、全体としてゆがみがあるのか、風が吹くとバラバラになるのか、これから見てみると分らない。自分では、柱の二本位は残るはずだと思っているので、そこからまた、やり直すことになるかも知れない。しっかりした建物になるためには、たくさんの雨風を受けることが必要で、皆さんにいろいろ言っていただけることは、大変有り難いと思っている。)

2 小著においては、全三巻が一定の問題を論じるため

に構成された、内的な統一性をもつ著作であることを論じ、(1) このことに疑いをもつ諸説が論拠とする箇所を別の視点から説明できること、(2) その「別の視点」、すなわちCAの全体を一貫する問題とは何であったかを明らかにしようとした。以下でごく簡単にこれらについてどのように論じたかを示しておきたい(この部分を当日はおおまかに目次を辿るだけで省いたが、ここでは全く触れないわけにはいかないだろう)。

第一点については、次のように結論している。

討論の歴史性という伝統的な問題に対しては、「討論記録」の体裁を対話篇という文芸上の伝統を反映するものと見なし、登場人物の発言は、事実にはなく著者が意図する議論の内的展開の必然性に基づいてそのように表現されていると考えるべきである。討論冒頭でのアリピウスの退場予告と少し後での退場、第II巻の討論からの再登場も、歴史性にはなく、全体の構成上の要請によるものとして読まれるべきである。アカデメイア派に与してアウグステイヌスと論争する役割は、若者リケンティウスとアウグステイヌスの同世代の親友アリピウスに振りあてられ、議論を重層的なものとしている。全巻は段階的構成になっていて、

ジュニアメンバー同士(第I巻)、ジュニアメンバーとアウグスティヌス(第II巻前半)、シニアメンバー同士(第II巻後半、第III巻前半)による討論、及びモノローグ(第III巻)から成るが、モノローグ部分もまたアルケシラース、カルネアデス、キケロを討論相手と想定して論じられている。この設定に応じて各段階にそれぞれ扱われるべき課題があり、全体で一つの論考を構成する。

従来の研究の多くは、登場人物アウグスティヌスの発言、とりわけ第III巻後半のモノローグ部分のみを重視する傾向にあるが、CAは著者アウグスティヌスの一貫した構想に基づいて隅々まで配慮された論考として読まれるべきで、アウグスティヌス以外の登場人物の発言もまた著者の構想を表現するものとして扱うべきである。登場人物それぞれがCAで担っている役割を無視することは全体を読み誤らせるだけでなく、モノローグ部分の本来の意義をも捉え損なわせている。他方、全ての発言を等しく著者アウグスティヌスの主張として読み、彼が批判している立場を代表する登場人物の発言をもアウグスティヌスの所説に帰すことは、CAをアウグスティヌスが新プラトン派や二世世界説に傾倒していた証として位置づけようとする主張に結びついてい

るが、それは対話篇という形式の意味を見落とすものである。

執筆順や表面上のテーマが近いことから、通例第I巻との緊密な結びつきが主張される『幸福な生』について De *Beta Vita* との問題地平の違いについて、対話篇の発言者の選定や用語法の相違を傍証に挙げることができる。

第巻のテーマは「幸福な生」よりもむしろ、「探求」、「知者」、「知るといふこと」等の認識論に関わる問題地平に求められるべきである。

第I巻を全体から切り離して位置づけようとする傾向に對しては、第I巻が全体の中で果たしている積極的な役割を示すべきであろう。CAの背景にある問題の一つは、ソクラテス以来の「不知の自認」の位置づけであると考えられるが、始祖プラトンのところでは探究の端緒として力を漲らせていた(Kalonkagathonの)「不知の自認」は、アカデメイアの伝統の中で不可知論と結びつき、人間の本性的で全般的な「不知」を標榜することへと転じる。研究者たちに殆ど顧みられることのなかった第I巻の討論の中で、アカデメイア派に与する若者リケンティウスに振り当てられているのは、アカデメイア派の唱える「謙虚な探究者の

生」が、「知」や「真」という問題を二世界論的構図のものと「向こう側」と「こちら（我々の）側」とに分断して語り出すものであることを、むしろ憧憬を込めて論じ、肯定的に披瀝する役割である。他方また、不可知論が探究の意欲を空しくするという素朴な批判も、第I巻で別の若者の口を通じて表明される。第I巻は「探究の端緒」があらためて論じなければならぬ状況をジュニアメンバーのレベルという設定のもとで描くものである。また、第I巻で「知る」をめぐって検討される、《到達（発見）……未到達（探究中）》という探究のモデル（道程モデル）と、道程と隔絶された《終点、究極 fins》による二世界論的モデルは、いずれも第II・III巻でアカデメイア派の真理観が描き出されるその構図の原型と見ることが出来る。

「書簡」については、これを純然たる「序文」や「本文のレジメ」として捉えてはならない。第巻始めの fortuna（運）をめぐる短いやりとりは、先行する二巻の書簡部分と照応するもので、幾つかの点を共有しつつ全体としてプロトレプティコス・レターの伝統にそうものとなっている。

3 第二点については、以下のように言うことができよ

う。

CAの全巻は、（新）アカデメイア派の懐疑論を論駁することに向けられていると読むべきである。「隠匿説」などに拠ってアウグスティヌスが実は批判していなかったとする主張は、問題を見誤るものである。「隠匿説」や、CA執筆の意図をネオプラトニズム称揚とする見解が重視する「哲学史」を述べる箇所は、注意深く本来の議論から外され、別の話として位置づけられていることを、アリピウスの発言の扱い方から示すことが出来る。

CA中でアウグスティヌスは、自身が一時期アカデメイア派の教えに傾倒していたと述べているが、彼の情報源はキケロの『アカデミカ』であったと考える十分な理由があり、アウグスティヌスは、そこで多彩に展開されているヘレニズム期の懐疑論と反懐疑論の論点を十分わきまえた上で、彼らの教えに傾倒し、その上でまったく新しい角度からこれを論駁しなければならないとしたと考えられる。

CAの「伝統的な読み方」は、モノローグ部分（とりわけ *perceptio*（認識）に当てられた第III巻二〇—二一章）を重視し、感覚を通じての認識の確実性の主張、また様々な論理的命題の真などが、いずれも不可知論に対する反対例の

資格で「確實」な「真、知識 *vera, positive knowledges*」として列挙されていると解し、アウグスティヌスの批判は先行するヘレニズム期の反懷疑論の諸説を超えるものではないと位置づけてきた。しかし、CAは『アカデミカ』を十分視野に入れた上で展開されていることを前提に読まれるべきであり、反対例の提示そのものはアウグスティヌスの反論の最終的ポイントではない。

アウグスティヌスの批判が極めて根本的で本質的な問題に焦点を絞っていることは、第巻の討論の冒頭で彼がアカデミア派の主張を紹介する際の扱い方から伺われる。アウグスティヌスは彼らの主張を、(A) 不可知論、(B) 同意・是認の保留、(C) アプラクシア批判を回避するためにカルネアデスによって付加された「是認可能なるもの *probabilia*」の導入という、三点に要約できるかたちで述べている。第II・III巻を通じて様々な角度から分析検討されるのは、これらの主張が、「知る」とか「真」をめぐる認識論に関する視点と「同意と行為」に関わる視点との二つの側面をもっているということであり、彼らの懷疑論の主張は必然的に行為論に及ぶものであるということである。懷疑論に対するアウグスティヌスの主戦場は、懷疑論に与

しているアカデミア派が、我々の行為、我々の生をどのように位置づけることになるかという問題にあったと考えられる。

懷疑論の主張は「(A) ならば (B) ならば (C)」という構造をとるとして、それに対して「(A) でない」と主張できれば、懷疑論の全体は成立しないと示すことができると考えられがちである。上記モノローグ部分重視の読み方はこれを言うものであるが、アウグスティヌスは上述のような仕方でも「(A) でない」を主張できればそれで済むようなものとしてアカデミア派の所説を考えてはいなかった。彼は、モノローグ部分で挙げられる「反対例」がそれ自体としてはアカデミア派に痛痒を与えないこと、不可知論を採るアカデミア派からそれらが「知」として認められないであろうことを十分承知していたのであり、その彼らの主張の堅固さは分断の構図そのものに由来することを正確に洞察していた。(B) (C) に充てられる彼の丹念な議論が必要であったのはそのためである。

神と人、不死なる者と死ぬ者、不変なる者と変化を被る者というような、いわば「自然本性 *natura*」の決定的な違いとして描かれる「断絶」や「分断」の意識が「知」を

めぐむ問題の地平に滑り込むこと、それは一体何を意味するの。……アウグスティヌスが問題にしなければならなかったのは、懐疑論の背後にあるような分断の構図そのものであったと思われる。

以上のような、決定的な「分断」を前提にして真や知を論じるアカデメイア派の議論のあり方を、小著では便宜上「論じ分け」と呼んだが、CAではアカデメイア派が採っている「論じ分け」のヴァリエーションがいくつか重要な箇所指摘されている。第巻では *verum* (真) と *verissime* (真に似たこと)、*probabile* (是認可能なること) とが、第巻では *scire* (知る) と *videri* (思われる) とが、アカデメイア派によって「論じ分け」られていることが描き出される。更に、モノログ部分で採用されている「*sapient-stultus* (知者—不知なる者) 型」の構図もこれに加えられる(これまで全く見逃されてきた *sapient* 型の各論への配備は「分断」の構図をいちいち示唆するためのものである)。

「論じ分け」を採用するアカデメイア派に対して、アウグスティヌスは独特の戦略的な「譲歩」を示している。第II巻第九章以降の *probabile* の幾つかの用例、第II巻第

五節以降の *videri* の用例の幾つかがそれである。それらはいずれも、アカデメイア派の使う表現を自分も使って構わないという装いのもとで登場しているが、彼はそれらを用いることによって、アカデメイア派と自分とが、同じ語を使いながら、全く別の知識観や真理観に立っていることを示している。それらが使われるどちらの箇所も、「知」や「真」を論じるCAの全体的な構想の中で特異な役割を担い、真理概念の違いを暴くというアウグスティヌスの大がかりな企てを支える箇所として位置づけられる。

異なる真理観に与することの違いをどこであらわにすることができるといふ問題は、CAの基本的な課題であった。不可知論をめぐって正反対の主張をするアカデメイア派とアウグスティヌスの間では、「真を知る」とはどういうことかについての一致があると前提して議論を始めることはできない。アウグスティヌスは、「真・真理 *verum, veritas*」とそれを目的語としてとる動詞(的)表現に注目し、その用例が彼らの間で異なることを通じて、そのことを明らかにしている。そしてまた、そのように相異なる真理観のもとでは、カルネアデスが、アブラクシア批判に對抗して、彼らの「行為論」に導入した *probabile* とい

う概念の意味も、この語と同様のものであると語られる認識論的ターム *verisimile* もまた、反懐疑論の立場に立つアウグスティヌスによるそれらの用法とは異なることになる。

最終的な問題は、異なる真理観の一方だけを退けるその論拠のありかを探ることである。アウグスティヌスは、人間にとって「真・真理」とはいかなる問題であるかという問を、最終的に、行為の成立を我々がどのように位置づけるかという問題のところであげている。「行為者」と「行為のかたち」を結びつける「自分自身の説得 (*sibi per suadere*)」という場面でアカデメイア派の真理観に与えることは、行為主体と説得の主体であるはずの「わたし」を徹底的に「真」から排除することになる。そしてそれは、我々の生を、自分にそのつど「生じる」ものとしての *probabile* (アカデメイア派の用語である限りでの *probabile*) に従って行動することとして描くことになる。アウグスティヌスの論駁は、そのような真理観、人間観に与する人々に向けられている。それが、探究の端緒として、「入口」で彼が自分自身に課さねばならなかったことである。

(二) アウグスティヌスの真理論という問題

1 さて、私にとっては、CAを三巻で「一つ」として読むとき何が読みとられるのか、それは我々に哲学的視点から見てどのような清新で深い問いの地平を切り拓くのか、は、たえずくり返される問いであった。そしてその結果は、一つの真理論の企てとしてこれを読むことへ帰着した。

小著の中でアウグスティヌスの懐疑論批判がどのようなものであったかについては私なりの見解を著したつもりでいるが、そのことを通じてまた、アウグスティヌスの諸著(彼が哲学的な思索を展開している代表的な諸著)に登場する *veritas* について、私自身はいくらか理解を深めることができたと思っている。但しそれは、何かこれまでの解釈とは違う真理概念のようなものがそこから析出されてきて、それをアウグスティヌスの諸著での *veritas* の用例に代入すると新しい図柄が見えてくるというようなことではない。そういうことではなくて、*veritas* ということを問題にするその問題にする仕方、言い換えれば、*veritas* とはどのような問題であるとするのかについてのアウグスティヌスに固有の洞察が、例えば近現代のそれとは異なるという点で、彼固有の真理論として位置づけられ得ると

考えるに至ったということである。

少しこの点について話すために、随分以前、或る辞典のために「真理」という項目で書いたものの一部を引用したい(注:『新カトリック大辞典』「真理」)。

……「真理とは何か」という問は、大別すると次の三つの仕方で応じられてきた。①実在なし存在についての教理とか教説を求める問として。②「(或ることが)真である」とはいかなることであるかの説明を要求する問として。これには代表的なくつかの説があるが、現代では意味論や分析哲学の登場によって、新しい装いの下の論争が生じた。③懐疑論や相対主義に対して、人間の生に於ける探究の可能性や知の成立根拠を問う問として。(以下略)……

ここに挙げた①②③という *veritas* につづつての三つの観点は、アウグスティヌスの諸著の中にいづれも見出されると私は思っている。この項目について書いた折、「真理①……、真理②……、真理③……」という風に国語辞典風を書くことや変だと考え、「真理とは何か」という問い

の問われ方という視点から、三つに分けて論じることにした。従って、アウグスティヌスに三つの観点があるという言い方でこのような三つの問い方があると直ちに言いたいのではなく、逆に国語辞典風に、用例として、例えば教理を *veritas* と言っている例、また②に応じるような、形容詞の用法 (*verus, etc.*) を使って *veritas* を語り出す例があると、とりあえずは言っておきたいだけである。

②について当該原稿の中では、その折の俄勉強で覚つかない限りだが、左に挙げたような「諸説・提唱者ないし出典」を簡単に解説した。

……「真理についての諸説」(一) 対応説 *correspondence theory of truth*: プトマン (*Sophistes*, 240D, 260 C-263D) : アリストテレス (*Metaphysica*, 1 011b26ff) : ヌベス・アクイナス (*De Veritate*, Q.1, A.1) : George. E. Moore / Bertrand Russell : Ludwig Wittgenstein : John L. Austin

(二) 意味論的真理規定 *semantic conception of truth* : Alfred Tarski

(三) 真理の行為遂行理論 *performative theory of truth* : Frank Ramsey : Strawson

(四) 整合説 coherence theory of truth : Gottfried Leibniz : Baruch de Spinoza : Georg Hegel : Otto Neurath : Carl Hempel : Rudolf Carnap

(五) 実用主義の真理説 pragmatic theory of truth : Charles Peirce : John Dewey.

これらはいずれも、②「あることが真である」とはいかなることかの説明として位置づけられるものだと考えられよう。つまり、私は②の例としてそのようなものを考えているのであり、そしてまた、アウグスティヌスの「照明説」とか「二世界論的説明」というのは、このような議論としての側面を持っていると考えている。通例アウグスティヌスの真理観として、それらが言及されるのは、その限りでは当然のことである。

しかし、アウグスティヌスにおいて、更に別の角度から、「真・真理」は問題にされている。当該の辞書の中では、③という視点をアウグスティヌスと結びつけて次のように書いている。

……「真理をめぐる問題」 真ないし真理という概念を、単純に、事実、無矛盾、充足、同意、検証といった概念

に、置き換えることによって説明することはできない。

上述の諸説(で言及したもの)のような仕方での置き換えは、この概念が我々の生を基礎づける根元的な価値概念としてあることを見失わせることになろう。また、正確さ、明証性、必然性、等も、真であるということが何等かそれらを伴うと語られ得るとしても、それらによって真が説明されるのではない。真は、知るとか探求するといった我々の生の根幹に関わる営みとの相関においてある価値である。一般に真はそのような営みの目指すところと解される。しかし、それは、「知る」の目的語として想定される対象のもつ性質のようなものではなく、「探求する」とか「知る」ということそれ自体を可能ならしめる原理として解されるべきである。このような真理観を我々はアウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 354-430)の思索に求めることができる。(以下略)……

③については、少し問題枠を限定しすぎた言い方(つまり、懐疑論や相対主義という限定)になってしまっているが、小著の序説で書いたように、私は、彼が *veritas* を位置づけるその捉え方(便宜的にアウグスティヌスの真理

観と呼ぶ)は、「現代の哲学が言語論・意味論の進展のもとで深化させてきた、真理概念の再検討という問題を共有しつつ、それらによっては十分論じられていないと考えられるこの問題のもう一つの側面について、きわめて示唆に富んだ議論を提起するもの」(p.14)だと見なすに至った。そのように言う場合に私の念頭にあるのは、②として扱われたような議論である。小著の中では、「間接的に示されるアウグスティヌスの真理観をA主题的にV扱った書物」(p.15)としてCAを挙げたが、そのような彼の真理観を強く反映する書物として、『告白』第X巻や De Trinitate VIII-XVを思い浮かべてもいる。「照明説」もまたそうではないかという反論がある。しかし、それが②のような説明として受け止められる限りでは、そのように位置づけることは難しいと思われる。

2 さて、アウグスティヌスの真理論と言うとき、この三つの観点は総合されなければならないのかという、相当深刻な問題があるように思われる。「深刻だ」と言うのは、総合されないでもいいと言えば、深刻な批判が四方八方から起こってくるのは必然だからでもあるが、冗談はさてお

き、私自身としては、アウグスティヌスを読むことを通じてそういう深刻な問題があるのではないかと思うようになった。

例えば、CAにおいてアウグスティヌスは、非常に丁寧な仕方、アカデミア派と自分とがそれぞれ立っている真理観の違いを描き出して見せた(と私は考える)わけだが、そこで彼が「アカデミア派の言論から」守ったことになる真理観(小著の中で「 Γ と呼んだもの)は、そのまま例えば「照明説」を語る文脈に直結されてよいとは考えられない。私にはそう思われる。彼の真理をめぐる論について議論するとき、何が区別して語られなければならないのか。それがそもそもの問題であろう。

たしかに一方で、アウグスティヌスが *veritas* という語を使うその用語法の分類といった研究がある。そして区別されたそれらは、何らかの位階的な構造を与えられて、例えば、その最高位に位置するとともに全く身分の異なる意味を与えられている「大文字の *Veritas*」との「関係」のうちで語られる(「照らすもの」と「照らされるもの」)。そういう仕方、(「総合的」に語られるということがあるだろう。しかし、それはもしかしたら実の所、問題の地平

を混乱させているのではないか。

例えば、アウグスティヌスが後に自分の出発点をふりかえって「真理の発見 (perceptio; Dods, Nagasawa) に反対するアカデメイア派」(Trin. 15. 12. 21) という言い方をするとき、その場合のアカデメイア派が反対している「真理の発見」とはいったい何のことであるのか。大文字の Veritas へと連なる何かとしてであると言つとしたり、それはそれで一つの言い方であろうが、そういう語り方は、少なくともそのままでは、何らかの前提(例えば「信仰に基づく何か」)から出発していると言われざるを得ない側面を持っていることになる。しかし、アウグスティヌスの真理論の真骨頂はそういうところにあるのではないのではないか。相当多様な仕方で表現されている彼の veritas についての諸々の言及を総合するような仕方で再構成しようとしても、その本来の意味ないし有効性を著しく減退させてしまう、そういうものではないか。そのように私には思われる。

彼はさまざまな角度から veritas に関して問題を立てている。それらは、異なった角度からアプローチされているので、別の角度からの言及をそれに勘案して読み込むこ

とは、いわば何かを相殺するような仕方、アウグスティヌスが切り拓いた問題の地平をぼんやりしたものにしてしまふように思われる。初めに述べた三つの観点の「総合」という問題に対しては、単純に三つの観点が交錯されてはならないという、はなはだ歯切れの悪い言い方になってしまふのだが、veritas ということを問題にするその問題にする仕方、veritas とはどのような問題であるとするのかについてのアウグスティヌスの洞察は、単純に「総合」をめざすような真理論として捉えられてはならないのである。

3 蛇足のような話だが、アウグスティヌスのテキストを読むときいつも気にかかるいくつかのことについて、少し話したい。最近は殆ど幽霊会員だが、前身のアウグスティヌス研究会以来、教父研究会は私にとって(身勝手な思いこみだが)親しい気のするところで、この機会に、話してみたいと思うからである。

アウグスティヌス研究の厚みの圧倒的な量は、私のような読者には重すぎて、しばしば降りたり辞めたりしたくなるのだが、それでもテキストそのものを読むとき、そこで

開かれている問題の地平のもつ或る確かさに惹きつけられてアウグスティヌスから離れられない。そして、その落差について思いめぐらすとき、どうしても自分なりに決着をつけなければならぬと思われることがある。

アウグスティヌスに関しては、一方ではよくできたアンソロジーのようなものがあり、一定の役を果たしているし、他方では大家の書いた見事と言っている「入門書」があって、我々を導いてくれる訳だが、そうしたものを編集したり書いたりした当の本人はそうではないにしても、それらの読者は（例えば私などは）結局何が問題であるのか読みとれない、そういうことがあるように思われる。これは古典研究の落とし穴のようなものではないかとも思うのだが、要するに「一つの議論」を通じてようやく何とか頭にされた問題の地平が、問題それ自体としてではなく、何かしら「歴史的な」視点から受けとめられて、直ちにある仕方ですら類型化されることを經由して、ある場合には思想的に一定の位置づけを与えることへ、ある場合にはアウグスティヌスというひとりの人物の内的発展の歴史を読みとることへと転じていくように見えることがある。そのような研究が無意味だと言いたいのではなく、そのような研究は、そ

れが哲学という営みそのものであるためには、別の強力な、メタレベルでの問題の地平を提示しなければならぬと思われるのだが、そのようなレベルでの問題地平との関わりを明確にしないまま済まされているようにも思われるのである。

だが、本当にそうなのだろうか。私がそう思うのは、何か他の多くの研究者たちと決定的に異なることがあるからなのではないのか。……ここには、執拗な疑いが入り込む余地がある。アウグスティヌスが教父であって、研究者たちの多くもまたキリスト教徒であるという状況は、私のように書物からアウグスティヌスに近づいた人間には大きなこだわりの種になるからである。最近の研究者については幾分変化があると言われているが、そのことが本質的な問題なのかどうかはよく分からない。キリスト教の信仰を持つことがどういうことであるかという問題はわきに置いておくとして、例えばあるドグマについてそれをナンセンスだとか理解不能な特殊なサークルの言語だと思っただことではないが、しかし少なくとも言葉についての或る種の感受性に相違が出てくるのではないか、信仰を持つ人が敏感にその軽重を計って受けとめることの出来る言葉に関して自

分は鈍感であつて、それが部分的な箇所ではなく大きな部分での読み違えを招いていないかという懸念を私はいつも抱えてきたし、テキストを読むに当たつて始終悩まされていたように思う。

しかし、結局のところは、そうした問題になんとか楔を打つておかなければ先には進めない。私は非常に素朴な或いは基本的なところで「居直る」ことにしたが、それが例えばC Aを一つの完結した議論として提示されていると考へることであり、そこでアウグスティヌスは極めて鮮烈で斬新な真理観を捉へることに成功したと考へ、その同じ著者が真理について、(C Aでのそれと根本的なところで異なるのではないが、相当に変幻自在な文脈の中で)別の議論を別の書物でしているとみなすことであつた。それとともに、他方でまた、同じ水脈にある議論として、中期後期の著作について理解を深めることが出来たと自分では思つている。いずれ、アウグスティヌスの代表的な哲学的著作と私が考へている『告白』第X巻以降や『三位一体論』を改めて読み直す試みを通じて、C Aでの真理論が更に充実していく過程を確かめるとともに、翻つてC Aがその出発点に位置したことを確認しなければならない。

C Aが何を問題にしていたのかを読み取ろうとするにあつて私がとつた方法は、とりあえずこの書物を、一つの全体として、それ以外のアウグスティヌスの著作からも切り離すようにして読んでみようとするのであつた。一つの書物を一つの全体として読むという、ごく当たり前のアプローチは、しかしながら、しばしば次のような哲学的疑似問題によつて阻まれる。「○○についての(××時期の)アウグスティヌスの主張、見解、態度とはどういふものか」といった問いにとつて、アウグスティヌスの当該時期の○○についての発言は、部分的に切り取られて『資料』として扱われることになるだろう。とりわけカシキアコム對話篇のようなケースはそうなりがちである。他方で、アウグスティヌスが論じていないことについて全く別の視点から、例えばフェミニズムの立場から、アウグスティヌスの諸著を検討して、一定の結論を得るといふのは、ひとつの研究のあり方であろう。しかし、彼が論じていることについては、「一つの全体」という枠を我々はもつと真剣に受けとめなければならないのではないか。そもそも哲学(的な思索)においては、問題そのものの展開を支えるのはロゴス

であって、それに耐える強靱さを備えた著者の構想を、我々はもっと信頼していいように思うのである。

この本を書くことは長いこと宙ぶらりんになっている宿題のようなものであったし、実際に一つの企画として手を付けるまでは、今さら面倒だなという気持もあったが、とりかかってみるとやはり力が入ってしまった。空回りしているようなところもあるだろう。しかし、書きながら私が思っていたことは、「CAってこんなに面白い本なんです」と言いたくてうずうずしているというようなことだったように思う。少し軽々しいと思われそうだが、これは私の実感である。

|| 討論 ||

教父研究会 第八九回研究会

一九九九年七月三日 於聖心女子大学

監修 加藤 信朗

記録作成 川崎 千里

加藤 信朗 (発表に先立って)

岡部由紀子さんの *Contra Academicos* に関するご研究は非常に長い道のりを辿ってこられて、幸い、今回、立派な書物(『アウグスティヌスの懐疑論批判』創文社、一九九九年)として公刊されたことは、私どもにとっても喜びとするところである。*Contra Academicos* はアウグスティヌスの最初の著作であり、第一のものであるがゆえに大事であるとも言えるが、アウグスティヌス研究において最も基本的なものである。しかしながら、この著作がそれ自体として難解を極めたものであるということ、さらには、

カシキアクム著作全体がアウグスティヌスのいわゆる成熟した著作、すなわち *Confessiones* 以後の著作のうちに表示されているアウグスティヌスの哲学ないし神学とどのように関わるのかということは、十九世紀以来、アウグスティヌス研究の一つの焦点であって、なかなか解決することの難しい問題であったと言えよう。だが、幸いにして、岡部由紀子さんが長いこと、このような問題に関わって下さり、このようななかたちで示していただいたことは私たちにとって大きな喜びである。これによって、日本語の、あるいは日本語を用いた研究が第一級の国際的なレベルの研究と比肩しうる、つまり、問題状況としてはその場所にじかに導き入れて下さるところまで示していただいているということとは非常に大きなことであると思う。もちろん、すべてが明らかにされた、発見されたということではないが、まさに、「発見のために探究されるべきであることが *probabile* である」ことが示されたのであり、その意味では探究の端緒になっている。これからのみなさんの、*Contra Academicos* 研究であれ、カシキアクム著作研究であれ、さらにアウグスティヌス研究であれ、岡部さんの仕事はどのような研究の一つの端緒となりうると思う。

加藤 信朗（発表の間に）

今のお話の中で、アウグスティヌスとアカデメイア派の二つの真理観と言われたが、それは真 *veritas* への関わり、一種の *attitude* であって、そのようなところで真を問題にしないと *Contra Academicos* の全体を読むことはできないということだと思う。つまり、真へ関わるとはどういうことか、ということが全体的に問題になっていて、その筋で読むならば、*Contra Academicos* 全体の *unitas* を見ることもできるという点で、オマール（J. O'Meara）に対する反論となっている。この後のディスカッションでは、アカデメイア派のとっている分断の構図を否定するのであれば、どこに H_1 が置かれているのかということがおそらく問題になると思われる。岡部さんは、アカデメイア派の「真理は発見できないというのが *Probabile* である」、アウグスティヌスの「真理は発見されるものであるというのが *probabile* である」という二つの *probabile* の対比によって H_1 の場所を示されている。そこで、*Contra Academicos* においては、 H_2 を批判する仕方では H_1 を浮かび上がらせるというそのような手法をとっていると断言していいのかをお聞きしたい。

加藤 信朗（発表後の討論のはじめに）

私は *Confessiones* を長く読んできたが、以前、聖心女子大学のキリスト教文化研究所の公開セミナーでカシヤクム著作を読もうかと思っていた時に、*Confessiones* の第九巻を読んで非常に驚いたことがあった。そこでは、「あたかも息を引き取る今わの際のように、傲慢の学派もしくは学校 (*superbiae schola*) の息を今なお吐き続けていたところの著作において」というかたちでカシヤクム著作に触れられている。確かに、初期著作は非常に難しい学校的なかたちというものがあるが、岡部さんはその一つ一つの壁を解きほぐして、表裏に重なっている紙を引き剥がすようにして何かが浮かび上がってくるというようにご著書の中で展開されている。岡部さんのこの本全体についてこの場所で議論することはできないので、この本を読まれた方々、そして岡部さんと長く論争を続けてこられた方々がおられるので、主として、そういう方々からご質問をいただきたい。まずは、神崎さんに一言、いただきたい。

神崎 繁

先ほど、論争と言われましたが、岡部さんは論争をした

お気持ちにはなっていないだろうし、私自身も論争というよりは岡部さんの仕事に触発されていくつか論文を書いただけにすぎない。ただ、ともかく、この書物が多かったことを私も嬉しく思う。岡部さんの代わりに私が思っていたことを私も嬉しく思う。バーニェット先生 (M. Burnyeat) が一生かけていいという対話篇、『テアイトス』に出会ったということや大学院生の時に聞いたことがある。そして、彼の『テアイトス』は、実際、二十年かかったものである。その点、岡部さんも二十年、いやそれ以上かもしれないが、とにかくそのような作品に出会われたということである。さらには、*Contra Academicos* が時間をかけるに値する作品であるということや岡部さん自身が証明されたということが、私にとってはとても大事なことだと思われる。それに関して、一つ文句をかねて申し上げたい。再び、バーニェット先生を引き合いに出させていたのだが、先生は『テアイトス』に関して十本くらいの論文を書かれている。それらを一冊の本にまとめるという場合、私のように個々の論文を追って来た者にとっては、個々の箇所に関してそれぞれ費やした論文のかたちとそれが本になったときに違ってしまっているということがある。良い

意味でも悪い意味でも、論文がある箇所に深く入りこんでゆくことと本にまとめるということは違うベクトルで動かざるをえない。そういう点では、岡部さんの本は個々のそれぞれの時間に出来上がった論文と一緒に読んでほしい。このようなことを申し上げるのも、ずっと岡部さんの論文を追って来た者としては、V次元という言葉が消えてしまっていて、いわば、その言葉に付き従い、あるいは疑問に思ったり、触発された者にとってはさびしい気がしている。この言葉が「E」で衣替えすることによって、岡部さんのオリジナル・インテンションの違った印象を受けた。

ここから本題に入るのだが、岡部さんの *Contra Academicos* に対する態度は七頁に表明されている。「アウグスティヌスの懐疑論批判は従来考えられてきたような近代的な確実性についての議論に還元されるようなものではないこと、それは先行するヘレニズム期の懐疑論批判にも還元できない」——私自身はヘレニズム期と関連づけているので、暗黙のうちのご不満だと思うが——、「他方、またCAでのアウグスティヌスがアカデメイア派懐疑論に自らの「信 *credere*」を認識論的に位置づけるための構図を求めていたとするような見方に対して、そうではないこと

を示したい」、これも私自身に対するご批判なのかもしれないが、また、「更に、研究者たちが CA に読みとって来た、新プラトン派や二世界論に対するアウグスティヌスの「傾倒」については強い疑念を表明したい」。アウグスティヌス理解においては、依然として、二世界説的な、ある意味では安易な新プラトンの解釈というものがあるのだが、*Contra Academicos* という限定つきではあるけれども、そういった安易な退路を断って、岡部さんが *Contra Academicos* の最も根本的な問題として析出されたのが、元 V 次元、今は ① であると思う。先ほど、加藤先生が ② を批判することによって ③ を浮かび上がらせるのかと聞かれたことに対して、岡部さんはそうではなく、ともかくも ② を切ることによって、と言われた。アカデメイア派の真理観を否定すれば自動的に ③ が浮かび上がってくることはない。そして、③ の積極的な内容として岡部さんが口ごもりながら言われたのは、行為において「真 (veritas) だと思ふ」こととして、わずかに真とのつながりが残されているということであった。その際、「真だと思ふ」の「思ふ」とはテキストにはどのような語なのか。さらに、それは、本の中で否定的に述べられた「信 credere」

と何か関係があるのか。懐疑論批判の最終的な部分である行為に関わる場面で *veritas* が出てくる、そしてそこで「思ふ」と言われたことの意味をお聞きしたい。

加藤 信朗

岡部さんに対して神崎さんが持っておられる疑問点を V 次元と関連させてもう少し説明していただきたい。

神崎 繁

岡部さんは最初から、*Contra Academicos* の懐疑論批判を、まず確実性という場所を確保してから議論が始まるのだという読みを退けるという立場をとっておられた。確実性で回復されるような真が誤解されているような真理観に関わりを持っていった。そういう方向をとらないために V 次元という議論をされたと思う。岡部さんはその V 次元への通路として *verisimilitudo* を関連づけようとなさっている。懐疑論が *verum* を知らないのに *verisimilitudo* が言えるのかと言うのに対して、アウグスティヌスは *verisimilitudo* をそのようにとらなかつたと岡部さんが主張される時の V 次元とは何であったか。

岡部由紀子

V次元は最初から使っていた語だが、誤解されることもあって切ってしまった。V次元は道具として、アウグスティヌスが *verisimile* とか *probabile* を H のレベルで語る際に、想定されている限りのV次元として使った。深遠なものとして使ったわけではなく、ある種の大文字の *Veritas* のイメージをこの議論では使いたくなかったが、その意図とは逆の反応があった。*verisimile*、*probabile*、*verum* も様々なレベルで言えると思う。だが、その全部を位階的なかたちで方向づけるのではなく、またそこから大文字の *Veritas* を理解しようという話ではなく、「*verum* だと思わない」という仕方だ。 *verum* をまつりあげて——これは H のV次元だが——、自分はそこへは達することはできないとして、*verum* から自らのあり方を切ってしまう、一見謙虚であるが、このような自制的な態度の持っている危険をアウグスティヌスは考えたのだと思っている。

credere に関しては以前にも聞かれたことがある。私は *credere* の射程がどこまでなのか、例えば、誰かを信じるとか、見たことのないアレクサンドリアの町がそのようであると信じるといった話とそうではない話があって、それ

らが何かつながっているかのように考えてしまっているのだろうかという疑問を持っている。アウグスティヌスの、*credere* はある深さを持っている言葉であり、それをどこで押さえるべきなのかと言った場合、その *credere* と行為において「真だと思ふ」という場合の「思ふ」が関係がないとは言えないが、違う形での議論が相当、必要であると思う。*verum* や *veritas* についても言えることだが、なにかにつけ違う形になさなければならない議論は沢山あって、アウグスティヌスはそれに忠実であったと思う。例えば、*De beata vita* の話が *Contra Academicos* とは一緒にはされなかったということの意味はあると思う。それぞれの著作の一つのロゴスを問題にできるような仕方でない、アウグスティヌスは読めないような気がする。

神崎 繁

私の質問は、「思ふ」が *credere* なのかというものはなく、当然、翻訳をされてテキストを読まれた結果出てきた言葉をお聞きしたい。例えば、*videri* とか、*opinari* とか。

岡部由紀子

とりあえずは、*videri* でもいいと思っっている。*opinari* だとは思っていない。場合によっては *credere* であると思う。ただ、第二巻で *opinari* が使われている箇所もあるのだが。

加藤 信朗

問題がまたひろがったように思う。どなたでもご質問をどうぞ。

水落 健治

credere に関して。岡部さんは、アレクサンドリアの町がそのようであると信じるという次元の *credere* と、大文字の *Veritas* に関わるような、いわば宗教的な次元の *credere* を分けるべきだと言われた。私もその問題をずっと持っているのだが、信仰の話で *credere* を論ずる際に、アレクサンドリアの話を出してくるのは、アウグスティヌスにおいては一般的な議論の立て方のような気がする。従って、二つの次元の *credere* は何らかの連続性を持つものと考えられるのではないか。だが、そうであるならば、二

つはどのようにしてつながっていて、どのように違うのか、ということが問題となろう。私にはまだよくわからないが、この問題はアウグスティヌスがアカデメシア派の二世界論を切っていることに関係するのではないかと思う。次元の異なる *credere* のつながりを単純な仕方で考えれば、プロティノスの流出説で説明することができらるだろう。しかし、岡部さんはそうは言っておられず、先ほどのお話では倫理性、行為のレベルで話しておられたが、このことに関してはどうか。

岡部由紀子

今のお話をうかがって、水落さんはオマールに近い話をしているのかという印象を受けた。*credere* に関して、確かに、アウグスティヌスはしばしばアレクサンドリアの例を出したり、また、その際、アウグスティヌスが何を目的として、誰を対象としてそのような話をするのかを考えざるをえない。私はそのような *credere* が信仰という意味での *credere* につながっているとは思えない。むしろ、私は、*veritatem facere*、あるいは *Confessiones* の第十巻に出てくるような意味での *veritas* を議論の中に登場

させるというところにアウグスティヌスの信仰のかたちが
あるのだと思う。……

Contra Academicos の中でアウグスティヌスは、アカ
デメイア派では、つまり²の方の v 次元では向こう側に
絶対的な知のレベルがあって、こちら側では知に至るこ
とができないので、*probabile* とか *verisimile* を導入す
ることによって真だと思わないで *agere* することに成功
したと言っていると私は思う。その際、アカデメイア派は
probabile とか *verisimile* が向こう側とは何らか関わっ
ているかのような例を出している。一方、アウグスティヌ
スはそうは考えない。ならば、 μ のレベルの *probabile*
とか *verisimile* とは一体何かということが問題になるが、
それらは *verum* に行き着くわけではないけれども、*verum*
なのかという問いを可能にさせるものである。行為の場
面が価値ということを述べたが、その価値とは、真理概
念が事実、整合性、無矛盾性、充足、検証、同意などと置
き換えられることが……。

加藤 信朗

credere というところから、キリスト教護教論的な枠組

みの中でアウグスティヌスも動いているとするとううなの
か、という問題はあると思う。確かに、*Contra Academicos* と *Confessiones* 以降の著作にはギャップがあるのは
間違いない。岡部さんは、 v 次元と言われた時に大文字の
Veritas と直結するような形で *Contra Academicos* を
読むということは適切ではないと示されたのだが、逆に
Confessiones から見た場合、第七巻に述べられている
Veritas 体験を外すと、*Confessiones* の言葉はほとんど
消えてしまうようなところがあり、*veritas in corde au-*
ditur といったようなものが *Confessiones* 以降の中心的
な課題になっていることは確かなことだと思ふ。その場合、
credere は信仰とは違うのではないか。 *regula fidei* はよ
く言われるが、信仰という主観化された場面では比較的少
ないのではないか。その意味で、近代的な護教論的枠組み
とアウグスティヌスが持っていた枠組みを根本的に洗い直
してゆく必要があると思う。アウグスティヌスの場合、聖
書との関わりを抜きにすると、*Confessiones* 以降の著作
は分からなくなってしまうということがあるが、それにも
かわらず、*Contra Academicos* が起点であったという
ことが事実、言われている。そうだとした場合、*Contra*

Academicos が起点であったということと Veritas 体験、あるいは聖書解釈とはどのような関係にあるのかが問われるであろう。先にオマーラの立場として、確実性のある証拠を出してそこから大文字の Veritas までもってゆくと述べられたが、そうではないのならば、アウグスティヌスの場合、大文字の Veritas は人間論的な意味で、人間の生き方に関してどのようなものとして位置づけられるのか。このことは中期以後の著作にも言えることであろう。また、岡部読解を中期以後の著作まで持っていたときにどうなのか、という別の問題もある。

やや超越批評的なことを一言申し上げたい。オマーラがそうであるのか私は分からないけれども、選言命題に関する確実性を出発点に行っているところがある。しかし、それを基軸にしてもしょうがないというのが岡部さんの解釈全体だろうと思う。私も岡部さんと同意見である。だが、ならば選言命題は何の意味もなかったのか。先に超越批評と述べたが、選言命題の確実性をアウグスティヌスは意識していないようなので、あえて言うと、P or not P は現代論理学において真である。しかし、それは真理には何も関係ない、対象や世界については何も言っていないと了解さ

れている。おそらくアカデメイア派からいっても、P と not P のどちらかが真であり偽であるのだから、P or not P は何の意味もない。だが、P と not P を一方が真、他方が偽と分けると P or not P の意味が抜けてしまう。P or not P はアリストテレスの排中律に根拠があり、アリストテレスは排中律と矛盾律を *axioma* と呼んでいる。一方、アカデメイア派の反論は対人論法、ストア派のゼノンの真と偽の定義が出発点になっていることは間違いない。ここにはストア派の論理学を研究していらっしゃる方がおられるのでお聞きしたいのだが、ストア派では命題論理になってしまっていてアリストテレスとは違っていると聞いているのだが、アリストテレスが *axioma* と呼んだものの意味がストア派でも意味づけられていたのかどうか。アリストテレスは矛盾律を存在の原理、排中律を探究の原理だと考えている。P or not P がなければ学問研究は出立しない。アリストテレスが *axioma* と呼んだのは、それを前提としなければ人が語り合うことや探究することである。従って、アリストテレスにおいては、個々の命題の真理、例えば、「今、日が照っているか、いないか」

ということよりも排中律の方がはるかに明証性がある。だが、ゼノンではそうはならない。ゼノンの真理観は対応説的なものである。しかし、*P or not P* は対応説的な構造を持っておらず、むしろ探究の出発点になっている。従って、もしストア派にその部分が抜けていたとするなら、アカデミア派の議論は当然だと思われる。アウグスティヌスの場合、*De trinitate* で言及されていることを例として挙げるなら、「生きているか、生きていないか」「これはどちらかが真でなければならぬ。*De trinitate* では「生きている」が探究の出発点になっており、*P or not P* は「生きている」ということに関係させて適用されている。アリストテレスにおいてもおそらく「生きる」という場面では問題になることだろうと思う。アウグスティヌスが意識したかどうかは分からないが、選言命題はやはり意味を持ちえたのではないか。*quaestio veritatis* や *veritatem quaerendam esse* ということとつながりえたものではなかったか。

岡部由紀子

オマーラの立場は従来の意見を紹介しているだけである。

アウグスティヌスが行った懐疑論批判はケケロですんでいるものを焼き直したにすぎないというものである。アウグスティヌス自身は加藤先生が言われた通り選言命題を非常に大事にしている。それは、*dialectica* が一番大事だという言い方にも表れている。*sapiens* 型と *stultus* 型を挙げた時に「*stultus* さえ知っている」という言い方で議論を展開したというポイントはあるが、それによっかかって批判をしたのではないというのが私の言いたいことであって、*□*において選言命題は無意味なものであると考えているわけではない。

神崎 繁

二二四頁に *agere* (行為すること) の中に *dicere* (語ること) を含めて言行するとあるが、これは重要な点だと思った。私はアカデミア派のストアに対する反批判には *agere* の中には *dicere* は含まれていないと考えている。これはアウグスティヌスによる拡張なのか、それとも岡部さんによる拡張なのか。

岡部由紀子

「そのようですね」という言い方も含めて、*agere* の中に *dicere* をいれて考えてもいい場面もあった。*Contra Academicos* の全体をみてもそのように解釈してよい場面はあった。

神崎 繁

古典的な懐疑論からひきずっているアプラクシア論とは、われわれは危険なく日常を送っているではないか、その時に何か真理を是認しているからそのように行為できるんだという批判であったと思う。そこに語るということをいれてしまうと、非常に複雑になるか、真理を語るという次元にまではいりこんでしまうという意味で本来の意図を裏切ってしまうのではないか。私は本来のアプラクシア論のプラクシスの中には *dicere* は含まれていないと思うのだが。

岡部由紀子

アカデメイア派はそうだと思う。 *probabile* の *est* は *verum* とは関係なく、ある暫定的に有効なものである。アウグスティヌスはその *est* を切っている。

神崎 繁

私は、*est* から *est* へと変わる際に、*agere* の中に *dicere* が含まれるというモメントが非常に重要な役割を果たすものとして読んだのだが。

中川 純男

est と *est* はどこかで接点があるからこそ、アウグスティヌスは反駁しようとしているのだと思う。その接点を考える場合、照明説と結び付けられないと言われたが、『ソリロキア』において言われる *veritate verum* をどう考えるか。先の加藤先生のご質問に岡部さんは簡単にお答えになっていたが、それも一つの *verum* のあらわれ方なのではないか。神崎さんが問題にされた行為も *verum* のあらわれ方ではないか。 *verum* と *veritas* の関わりをどのように考えるのか。

岡部由紀子

私は *verum* と *veritas* を完全に分けてしまえる用法を見つけたせなかったし、それゆえに両者の関係を分有や照明説などを用いずに考えたいと思った。

中川 純男

verum はおそらくアウグスティヌスにおける真理の場であらわれるものではないか。つまり、行為するそれぞれ人間に真があらわれるのであって、それはアカデメイア派にとってもあらわれてくるような仕方ではない、少なくとも誰にとってもという仕方ではあらわれてこない真なのではないか。

岡部由紀子

大変難しい言い方であると思う。verum があらわれると言っているのだろうか。probabile Ⅱ があらわれるとは言ってもいい。それが verum としてあらわれるとも言える。

水落 健治

今までの議論を明確にするために、少し視野を拡げてみたい。例えば、アタナシウスは最初はプラトンの流出説をとっていたが、*De incarnatione* では超越者と被造物との断絶を強調している。そういうことからアタナシウスのニケア正統主義が出来てきたと一般的には考えられている。

カッパドキアの教父たちも同様に、例えば、ニュッサのグレゴリオスは「神の闇」ということを言って超越者との断絶を強調する。だがその一方で、エペクタシスと違って、見えないものに向かって一步一步進んでゆくという構図がグレゴリオスにはある。岡部さんの立場は *veritas* と *verum* の断絶をむしろ否定しておられるのだが、ニケア正統主義を背景としてみた場合、両者の関係はどうなるのか。さらにはアカデメイア派の二世界説とつながりがあるのかないのか。

岡部由紀子

キリスト教文化の中にも二世界説のモデルがあると思われるが、アタナシウスが流出説から超越説へと移行した際に、問題の何が動いたのが真に問題とされるべきまであって、流出説や超越説そのものが問題とされるのではないと思う。従って、アウグスティヌスのそれぞれの著作の中で *veritas* がどのような問題として語られているのかが問題であって、さまざまな箇所に出てくるものを一括するような視点に重点を置くべきではないと私は考えている。

もう一点。アウグスティヌスは *Contra Academicos*

の中でアカデメイア派みたいな信仰を否定している。

柴田美々子

私は最近シモーヌ・ヴェイユを読んでるのだが、二世界論的なものと一世界的な表現とが混在している。同じ用語が両義的に使われている。ひょっとして *Contra Academicos* においてもそれと同じような問題が展開されているのだろうか。また、これは感想になるのだが、岡部さんが真理が無矛盾性などではなくて価値なのだと言われたことに照らされた気がしている。

さて、先ほど *Confessiones* の第十巻の *veritatem facere* について触れられた。これは告白をすることにおいてあなたの前で *veritatem facere* という文脈であったと記憶している。その場合、*veritatem facere* とは事実を包み隠さず、その時自分が何を考えていたのかを告白するという意味ではおそらくないであろう。また論理的に教義に則して解釈して語っているわけでもないであろう。 *Confessiones* は自らの人生を語ったものではあるが、そこで *veritas* と言うか、価値と言うか、何かいいものを取り出して書いたものであるように思う。解釈の場での価値の明

証性みたいなところで *veritatem facere* という言葉が出てくるのではないだろうか。

もう一つ、*creare* に関して。地理的な知識などを信じるといった場合、事実としてどうだとか、あるいは論理的にどうだとか、というのではなく、そのことを生活や行為においてよいものとして生かしてゆく、よいものとして解釈するといった場面で *creare* を考えてもよいのだろうか。

岡部由紀子

シモーヌ・ヴェイユに関して言われたことは全くその通りであると思う。二世界論的な説明が出て来たり、それを否定したりということは、他の著作家にも見られることであろう。ただ、その同じ枠組みを使ってはいるが、そこで何が言われているのかは常に同じだとは到底思えない。

真の分断に関して。アカデメイア派の分断は、一方でまつりあげられ、その一方で根拠などと言われ入り込みやすいものである。アウグスティヌスはアカデメイア派とは違う仕方でも、もちろん自分が *veritas* に届くというような言い方ではなくて、どのようなかたちで *veritas* と関わ

りを持つのかを探究している。*Contra Academicos* においては、行為する人間として、言行する人間としてと見えよう。*Confessiones* において私が非常におもしろいと思うのは、自分について誠実に記述することがそのまま真を語ることだと言われている点である。その場合、どのようにして真と関わるのが問題であるが、柴田さんが言われたような「解釈」にまで広げるためにはもう少し言葉が必要であろう。*Confessiones* では、「愛する」「よろこぶ」という話の中で *veritas* が出てくるが、われわれにとつて真の問題は解消されないものであって、あえて言うならば照明説は説明のためのものであって、本当に照明説が意味を持つかたちでアウグスティヌスの中期以降の著作において出てくるのかは疑問である。

鎌田伊知郎

岡部さんは価値とわれわれの生のありかたを関係づけられておられるが、その際の生のあり方は一様ではないであろう。高度な議論をしている場合、泣き出す人や議論をやめたいと言う人はいないであろう。だが、生のあり方を考える場合、そういった人がいるのではないか。*Contra*

Academicos の中で人がどれだけ泣いているかは分からないが、*Soliloquia* では泣いている。*Confessiones* になると、過去に涙してしまった経験や闘技場で興奮したことなどの過去の傷とも言えるような事柄が真理探究や対話の中でむしる問題とされているように思われる。つまり、ある命題を前提に鋭い議論をするだけでは個々の論者の生のあり方を十分に展開しがたいのではないか。アウグスティヌスは後年にいたるとそうした個々の論者の言葉を深く聞いてゆく面が出てくるように思われる。*Contra Academicos* の中でそのような論点はあるのだろうか。

岡部由紀子

私は *Contra Academicos* の会話の部分すべてアウグスティヌスの手によるものと考えている。極端な説であるが。その対話の中ではさまざまな話し方がとられており、あまり制限がない。これについては、*De doctrina christiana* の第四巻あたりで展開されている。

十数年前にある事典の「真理」という項目について書いたことがある。「真理とは何か」という問いは次の三つの問いとして考えられる。第一に、実在しないし存在について

の教理・教説を求める問い。第二に、あることが真であるとはいかなることかというについての説明を要求する問い。第三に、懐疑論や相対主義に対して人間の生における探究の可能性、知の成立ポイントを求める問い。これら三つの仕方であウグステイヌスが問うているとは言えないものの、教理や教説に相当するものを *veritas* と呼んでいる箇所もあり、*illuminatio theory* は第二の問いに相当するのではないかとも思う。そして、第三の問いが *Contra Academicos* において問われていることではないかと考えるのだが、これら三つを総合しなくてはならないと考えるのは問題がある。少なくとも私は三つの問いは別々に問われているのであって、別個の問題として考えた方がいいのではないかと思う。

加藤 信朗

鎌田さんは、*Confessiones* では泣いたり、笑ったり、夢中になったりという話がしばしば出てくるのに対して、*Contra Academicos* は学者のする難解な議論という違いについて質問された。岡部さんは直接お答えにならなかったが、岡部さんの本を読んで分かる範囲で私が代弁したい。

岡部さんの本を読んでいて、中でも鮮明に浮かび上がってくるのは、アカデメイア派にどっぷりつかってしまったリケンティウスという青年のあり方である。詩に夢になる一方で、極めて頭のきれるこの青年をあウグステイヌスが導いてゆくという思いやりが岡部さんの本を読んで非常によく分かる。しかも、この本全体がリケンティウスの父親であるロマニアヌスに宛てられているという大きな枠組みも岡部さんは示された。そういう意味では、*Contra Academicos* はドラマとして構成されている。真を探究するという、あるいは真は発見されないと考えて絶望してしまふ人間の生のあり方全体にかかわるドラマである。

荒井 洋一

涙についてお尋ねしたい。*Contra Academicos* の中で「我々のほとんど全員が」涙を流すという場面が岡部さんの本の八十八頁から八十九頁にかけて生き生きと翻訳されている。ここで興味を引かれるのは、註六十九でオマーラの学説が引かれていて、討論の歴史性という観点からすれば、全員が涙を流したことは非歴史派の方に加点されると言われていることである。少し頁をさかのぼって別の場

面での四十三頁の註二十六にも「現実に行われた討論の相当忠実な記録であるという主張に不利な証拠と言われることがある」と注釈が付け加えられている。さらに頁をさかのぼって五頁において、私自身もそこから多くを学んだところであるが、*Contra Academicos* は内的必然性をもって三巻にわたる議論が展開されているという岡部さんの一貫した主張があらわされている。だが、岡部さんは五頁の一行目では、「全くの創作ではないであろうが」とも言われている。つまり、ということは読み方によっては非歴史派に加点する立場もあるだろうけれども、歴史派の方に加点することもできるのではないかと思うのだが。

岡部由紀子

「前に言ったが」と言われるものの本書においてはその部分が欠けていたり、泣く箇所に関してはオマールがそのように言っているわけだが、これに関しては歴史的でないからそのように書けたのだとも言えるし、逆も言えるといふのは全くその通りだと思う。私が言いたいのは、例えば泣いた場面ではあるかたちで共有された何かがあって、それをシナリオを書いているアウグスティヌスが使っている

ということである。とにかく、この著作はアウグスティヌスではない人がこう言ったからというかたちで議論を進めているのではないと私は考えている。

樋笠 勝士

岡部さんは *illuminatio theory* に否定的な態度を取られるが、*Confessiones* の第七巻における *lux veritatis* といった言い方にも明らかのように、光と真理を関係づけている。その一方で、*De magistro* における *consulere veritatem* という言い方には光の表象は全くなく、人格的な印象がもたされている。*veritas* という言葉で表される当のものは、*veritas* という言葉しかないのだから、う他ないのであるが、*veritas* を特徴づける言葉には多面性があるのでないか。照明説に関する古典的な問いとして、光の形而上学か、光の比喩か、というものがあるが、アウグスティヌスの場合はどちらかという比喩とする説が濃厚であった。もしそうであると、アウグスティヌスが *veritas* を語る際にそのような比喩的言説を使わざるをえなかった必然性があったのではないか。

岡部由紀子

光の比喩、照らす、照らされるという話は当然いろいろな議論の中に有効に組み込まれるものだと思う。照明説は *verum* と *veritas* の間を一つの話に組み込むモデルだと思う。

加藤 信朗

今回のご発表は岡部さんにとってはひとつの行き着いたところであろうし、ここから始められることもあるだろうと思う。また、われわれは岡部さんの本を手がかりに研究をはじめることができよう。ありがとうございました。

(註 J. O'Meara の日本語表記についてはアイルランド出身の方にかがった表記「オマーラ」に統一させていただきます。「……」の部分は録音テープに保存されていないものである。——加藤記)